十年

中戸川吉二

大正八年の初秋、十年前の今頃のこと私は吉井勇が久米正雄の両君と小田原の藤館にゐた。「人間」の創刊号へ原稿をかくための旅行だったと思ふ。私は「イボタの虫」外二三篇の短篇小説と、「文財する心」を前半位書いた時分で、新進作家のはやくーだった。創作に熱中してゐる時代であった。

大正八年といふと好況時代の頂点である。私は併し、世の中がどんな世の中であるか少しも知らなかった。一枚一円五拾銭位貰ふ原稿料を有難がってゐた。そしてその割で短篇小説を造ることに没頭してゐた。いい小説が書きたい、書けたら死んでもいい、といふのではない、死んでしまいたい――正直、そんな風に思ってゐたのだ。どうして死ぬことを直ぐ考へたのか今からは不思議のやうで

(SM印 A…1) 10…20

ある。其の時分私の書いた小説に、「犬に顔をなめられる」といふのがある。十九の夏ある海岸で自殺を試みて失敗した、その、苦々しい記憶を誇張して小説したものだ。気持としてくせにもなってゐる、勿論年少の感傷癖も手傳ってはゐたらうが、名作を書いた死ぬといふ風な古風な、弱々しい、ふにやふにやした気質は咲棄すべきである。菊池寛式の生活力の丈も欽仰した青年だったわけだ。

私は捨身で小説を書いてゐた。一つの小説を書いてゐる時、いつもそれが最後に書く小説だといふ気がしてゐた。書けたあとに、又次に書く材料があるといふことは信じられなかった。事実は、其の後三四年、次々と小説を書いて暮してゐたわけだが。……

藤館に滞在中、吉井久米雨君によって作家生活の仮幕を幾らか知った。小説のすべてが遺書であるわけもない。しやうと試みれば事務的にも書けるものである。——つい此頃、湯川原に一週間ゐて、五百首ほど歌が

(SMEp A…1) 10…20

出来たよ。さう云つて、わッはッはと西郎さんのやうに身をゆすつて笑ふ吉井勇を、私は吃驚りしてみつめてゐたのであつた。

まづ吉井君が去り、久米君も歸京して、私はひとり小田原に残つた。そして二ケ月ほど小説を書いて暮した。宿屋の茶ぶだいの上にいつも原稿用紙が散らかつてゐた。書けなくなると腹を立て、酒を飲んだ。浪の音に気をとられてゐた。……

甚頃吉井君はもう相應な年輩だつたが獨身で、匿ふに家を持つてゐた。私は小田原からのかへり吉井君の家へよつた。一二泊したやうに記憶してゐる。或る朝吉井君が自身で作つて食はせてくれたオムレツが、ひどくうまかつたのをまだ忘れない。――近所の中学生からでも借りたものであらう、机の上に教科書の西洋歴史がひろげてあつた。ウイスキーの肴に、ナポレオン遠征のくだりを讀むのがつい飲みすぎる、などと云つてゐた。ひどく寂しい気な生活だが、うはべは九州男子らし

く豪放に構へてゐる。私は吉井君にちよいと惚れたのだ。――今でも横浜の田島君とか国木田の岩ちやんとか、トロセイトロセイと口癖にして吉井君をニセさん扱ひにする文学青年はたへないやうだが、私が元祖だつたのかも知れない。……

十年たつた。

私は今、十八貫百五十匁の体量がある。世間で紳士といふからは自分でも紳士のつもりでゐる。ひよろひよろした文学青年でだけはなくなつた。もう六七年も小説を書いたことがない。他の理由もあるが、小説を書くためへんに気持のすさむことがなりより辛く、苦しいのだ。小説を書くとなると、つい昔の気持に引きづり戻されるやうな気がする。……

私は無鳥徒食、重い体をもてあまして日を過してゐる。世の中のすべてのことに目を用じてゐる。此頃の思潮風俗なに一つ気に入るところがないから、オブロモーフと共にほろびてしまうことをいささかも遺憾と思つてゐ

(SMEP A…1) 10…20

ない。ただ、小説を書くよりほか金をとるすべをなに一つ覚えなかった私は、親の遺産も整節のやうにけづりへらしてしまった今、未年あたりから、どうして妻子を養ったものかしらといふ煩悶だけが残ってゐる。

昭和四年十月鎌倉にて。

松屋製

(SM印 A…1) 10…20)